創世ホール通信 No.259

催し案内＋文化ジャーナル
2016年８月１日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎

植物と貝に名前をつける会

８月７日（日） 10時～16時

会場●２階ハイビジョン・シアター　無料

講師●**河野圭典**先生（貝）、**木下　覺**先生（植物）

主催●**北島町立図書館**（☎698・1100）

■事前に下調べをしてきてくださいね。

赤ちゃんとお母さんのためのビデオ上映会「かわいいミッフィー」

８月10日（水） 11時～

会場●２階ハイビジョン・シアター　無料

内容●「**かわいいミッフィー**」（35分）

対象●**０歳から３歳までの乳幼児とその保護者**

主催●**北島町教育委員会**（☎088・698・9812）

■子育て支援の催しです。乳幼児とお母さん・お父さん歓迎。大きなシートを用意しているので、赤ちゃんがはいはいしても、よだれを垂らしてもだいじょうぶ。オムツ換えもできます（でも紙おむつは持ち帰りでお願いしますね）。

生きがい講座受講生写真作品展

８月10日（水）～14日（日） 10時～18時

＊最終日は16時半まで　　11日（木）は祝日のため休館

会場●２階ギャラリー　入場無料

主催●**北島町社会福祉協議会**（☎698・8910）

きたじまひょうたん阿波おどり

８月14日（日） 11時～13時

会場●３階多目的ホール　無料（要整理券）

主催●**北島町商工会**

北島町平和のつどい「地球が動いた日」

８月20日（土） ２回上映　①10時～　②14時～

会場●３階多目的ホール　無料

作品●「**地球が動いた日**」

主催●**北島町・北島町平和のつどい実行委員会**（☎088・698・1100）

江富久雄◎こども写真展

８月26日（金）～28日（日）

10時～18時　最終日は17時迄

会場●２階ギャラリー　無料

主催●**江富久雄こども写真展実行委員会**（☎088・698・6888）

創世ホールミニシアター★３・11映画祭連帯◎ドキュメンタリー映画上映会「水と風と生きものと」

９月24日（土）・25日（日） 毎日２回上映

①10時半～　②13時半～

会場●２階ハイビジョン・シアター

入場料●前売／一般**1300円**（当日**1800円**）、大学生以下＆シニアは**1000円**（当日のみ）

作品●「**水と風と生きものと～中村桂子・生命誌を紡ぐ～**」（藤原道夫監督作品、2015年、日本、119分）　製作・著作：**メディア・ワン、ＪＴ生命誌研究館**　企画：**村田英克**　プロデューサー：**牧弘子**　出演：**中村桂子、末盛千枝子、赤坂憲雄**ほか　監督：**藤原道夫**

主催●**「水と風と生きものと」上映実行委員会**（メディア・ワン☎03・5790・7022、創世ホール☎088・698・1100）

■2012年、**徳島ホール**で上映され、７百人以上の動員を記録したドキュメンタリー映画「**自尊を弦の響きにのせて～96歳のチェリスト青木十良**」の鬼才・**藤原道夫**監督の最新作上映会が**北島町**で実現。プロデュースは**小松島市**出身の敏腕制作者・**牧弘子**さんです■【内容】**大阪府高槻市**にあるＪＴ**生命誌研究館**の館長を務める科学者・**中村桂子**の日常に密着し、その哲学と活動を追ったドキュメンタリー■東日本大震災の発生後に**宮沢賢治**を読み直した**中村**は、「**生命誌版　セロ弾きのゴーシュ**」の舞台化を決意し、**賢治**の故郷である**盛岡**や**花巻**を訪れる。「人間は生きものであり自然の一部」と語る**中村**が、自然に目を向けながら暮らす様々な人たちと語り合う姿を映し出すとともに、舞台のメイキングから本番までを追う■会場（当館２階）受付付近では、**生命誌研究館**の出張特別展示も行います。

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

採録◎中相作講演会
永遠の十三～海野十三と江戸川乱歩⑦

2014年5月17日(日)●北島町立図書館2階ハイビジョン・シアター

●創世ホール・アーカイブスの一環として、2014年に海野十三(うんの・じゅうざ)の会主催で開催した中相作(なか・しょうさく)氏講演会「永遠の十三～海野十三と江戸川乱歩」の講演採録を連載でお届けしています。(文中一部敬称略／採録文責＝小西昌幸)

■乱歩は戦後、本格探偵小説を最高のものと考える本格至上主義者として歩み始めましたが、だからといって本格の凄い作品が書けるわけではありません。書こうという意欲はあったものの、書けませんでした。そもそも本格探偵小説の傑作というものは、十三も指摘しているようにおいそれと書けるものではありません。しかし乱歩は、本格至上主義の論陣を張りました。十三はそれを批判してこんなことを書いています。《そういうことが分っていながら、若い作家たちを、そういふ方向へ追ひたてるやうな者があったら、その人は変態男であるといわれても仕方があるまい。》

■十三ははっきりと、乱歩のことを変態だといっています。探偵小説という何をどう書いてもいいはずのものを、本格という旗のもとに統一しようとするのは変態と呼ばれてもしかたのない行為だといっているわけです。これはもちろん、乱歩の戦前作品が変態的であるといわれていたことを踏まえた上での罵倒なんですけれども、《変態男であるといわれても仕方があるまい》というのは強烈で、十三が本気で怒っていることがわかります。

■乱歩がぶれたことに、十三は怒っていました。戦前には、といってもつい10年ほど前のことなんですけれど、日本の探偵小説は多様であっていいと言っていた乱歩が、戦争に負けた途端にまったく逆のことを言うようになった。それを批判する十三の主張は、少年のような純粋な怒りを感じさせます。そして十三は、探偵小説はどうあるべきか、次のように書いています。《探偵小説らしい探偵小説を書くべきであると思う。／シャーロック・ホームズ探偵だとか怪盗ルパンへ復帰すべきである。／あゝいう探偵小説こそ、真に大衆に愛好されるいゝ探偵小説なのだ。》

■この意見には異論も出てくると思います。本格探偵小説が好きな人、マニアと呼ばれるような人は、別に大衆に愛されることは望まないでしょうし、ホームズやルパンはもう古い、探偵小説はホームズやルパンの時代よりもっと進化しなければならない考え方もあったかと思いますが、十三はそうは考えませんでした。ごくふつうの人たち、いろいろな悩みや苦しみ、辛いことや悲しいことを抱えて生きている名もない人たちが、つかのまでも目の前の現実を忘れて、ひととき没頭できる娯楽として探偵小説を考えていました。ですから多くの大衆に愛好されるのがいい探偵小説であり、それこそが最高の探偵小説であると考えていました。

■ここまではっきりと主張してしまうと、乱歩と十三はもう相容れることがありません。十三はこの文章でさらに乱歩を批判していて、たとえば海外の探偵作家も槍玉にあげていますけれど、ここに出てくるクロフツやフィルポッツの作品は、実は全部乱歩が褒めている本格作品なんです。乱歩が褒めていることを知った上で、十三はけなしているわけです。引用してみますと《クロフツの『樽』みたいな退屈な面白くないものを探偵小説の十大傑作の一つなどと褒めるのは愚の骨頂だと思う》とありますが、乱歩は『樽』を世界の探偵小説ベスト10のひとつにあげています。そして最後に、いよいよ乱歩の名前が出てきます。

■《乱歩氏は『石榴（ざくろ）』を自分の名作として居るが、乱歩氏の作品を年代順に読んで来て、あれにぶつかると、小手先の器用さは気がつくが、およそ総ざらえ的な陳腐なもので、乱歩独特の高い香など少しも感ぜられない。だから私は、あの作は駄作だと思っている。》十三は「駄作である」とはっきり言い切っています。『石榴』は昭和９年、乱歩が「中央公論」から原稿依頼を受けて、本格探偵小説を目指して力を入れて書いた作品だったんですけれども、十三はその作品にも怒りを向けていました。

■しかも十三は、この怒りに満ちた文章を乱歩に直接、叩きつけていました。というのも、この「探偵小説雑感」が載ったのは「探偵作家クラブ会報」の昭和22年11月号で、このときはまだ手書きのガリ版刷りで発行されていたんですけれど、この「会報」を出していたのは実質的には乱歩でした。乱歩が出していた「会報」に乱歩批判の文章が掲載されたわけです。

■探偵作家クラブから十三に原稿の依頼があったのかどうか、そのあたりのことはよくわかりませんが、たぶん十三の方から進んで投稿したものではないかと思います。つまり十三は、乱歩が戦前に比べて変節してしまったこと、ごく狭量（きょうりょう）な、心も狭ければ視野も狭い、本格だけしか目に入らない本格至上主義者になってしまったことに対する怒りを叩きつけるために、乱歩が中心になって運営していた「探偵作家クラブ会報」に、露骨な乱歩批判を投稿したことになります。

■しかし乱歩の方では、それをちゃんと載せているわけです。自分への批判は批判として受け止めて、それを「探偵作家クラブ会報」に掲載しました。しかも、それに対して反論は書いていない。また、あとになって発表した十三を回想する文章にも、このことはいっさい書いていません。ですから乱歩がこの十三の文章を読んでどう思ったかはわかりませんけど、自らの変節を鋭く指摘されて、たぶん大変耳に痛いと感じたのではないかと思います。ほかには誰一人として、乱歩に批判を向けた人はいなかったんですけど、海野十三という仲の良かった作家が自分を批判をしているということに、乱歩は驚きながらも、胸に響くものを感じたのではないかと思います。

■さて、それからどうなるか。乱歩と十三の間にはたしかに対立が生じましたが、それ以前に十三は病に侵されておりました。昭和22年に「探偵小説雑感」を発表して、その２年後、昭和24年５月に、十三は結核のため51歳で死去してしまいます。ですから乱歩は、十三から激越な乱歩批判を突きつけられながら、一方で病床の十三を心配していました。

■今日お配りいただいた「ＪＵ通信」に、海野十三の告別式で乱歩が読んだ弔辞の抜粋が掲載されていますので、読んでみます。《君の懇切を極めた友情は友人後進達の凡てが口を極めて称える処だ。君はなくなるその日にすら友情の手紙を書いている。一例を挙げると僕がある事件で手紙を出したのに対し、なくなる当日の十七日に返事を出してくれている。それにはいつもの君の上手な毛筆で用件の他に私の心臓の悪いと言うことを伝え聞いてその養生法について懇切を極めた言葉が書きつらねてあった。そして最後に「私もだいぶ元気づきました」と君の明るい近況が書いてあったのだよ。十八日近親のお通夜もすませて帰ったその翌朝君からのその手紙が着いた。私は涙をこぼしてこれを読んだ。》

■乱歩と十三、探偵小説の考え方・探偵小説観では多少の差異があり、そして終戦直後には、乱歩は戦争の影響で強硬な本格至上主義者となり、そうした乱歩の変節を十三は激越な調子で批判しました。乱歩も十三も、戦争のせいで精神がこわばってしまって、それぞれの硬直したような意見を声高に主張していたという印象があります。しかしそれはその場限りのことで、お互いの身を思いやり、病床にあっても乱歩の身体のことを気遣うという十三の心優しさは乱歩にも十分伝わっていたでありましょうし、それゆえ、乱歩は涙を流して海野十三の冥福を祈ったということになります。(続く)

情報メモランダム●小西昌幸

アイリッシュ音楽LIVE★きゃめる■8月16日(火)にギャラリー**花杏豆**(はなあんず)でアイリッシュ音楽ライブがあります。出演は《**きゃめる**》。メンバー全員女性で、東京芸大音楽学部楽理科卒という大変な経歴の人たちです。ご注目ください。

日時●**2016年8月16日(火)18時半**からお食事　**19時半**からライブ
会場●**花杏豆**(はなあんず)　徳島市八万町上長谷81－5　電話088・668・6465
料金●**3000円**(食事つき)
出演●アイリッシュ・ガールズ・バンド《**きゃめる**》(**酒井絵美**〔フィドル〕、**高梨菖子**〔ホイッスル〕、**成田由佳里**〔バウロン〕、**岡皆実**〔ブズーキ〕【ゲスト】**岩郷佑美**〔ウッドベース〕)
備考●チケットは発行しないので、必ず電話予約をしてください。

高知県立美術館で空想特撮映画上映会■**高知県立美術館**では今年も特撮映画大会があります。私（小西）は友人たちと日帰りツアーを組んで参加する予定です。過去には怪談や妖怪映画、怪獣特撮映画などの大会に何度か参加したことがあります。今回は４本とも全て監督**本多猪四郎**、特技監督**円谷英二**、音楽**伊福部昭**という黄金最強トリオが結集した東宝作品です。個人的に私は、幼い頃、封切り時に「キングコングの逆襲」を見て強く印象に残っているので、超楽しみです。とにかく毎回超渋いラインナップの高知県立美術館の映画上映会。愛好家は高知に足を向けて眠れません。

日時●**2016年8月27日(土)10時～Aプログラム　14時～Bプログラム**
28日(日)10時～Bプログラム　14時～Aプログラム
会場●**高知県立美術館ホール**　高知市高須353－2　電話088・866・8000
入場料●一般１プログラム前売り**1000円**(当日**1200円**)、小学生以下１プログラム前売り**500円**(当日**600円**)
内容●**Aプログラム**＝「**地球防衛軍**」(1957)、「**宇宙大戦争**」(1959)
Bプログラム＝「**宇宙大怪獣ドゴラ**」(1964)、「**キングコングの逆襲**」(67)

2016年度の創世ホール企画、９月以降～

■今、決定している当館の本年度企画は、次の通り■９月24～25日にドキュメンタリー映画「水と風と生きものと」上映会、11月22日(火)に北島トラディショナル・ナイトが確定■そして来年２月には創世ホール講演会で評論家の四方田犬彦さんが日本漫画界の超ビッグネームについて熱く語るという企画を秘かに準備中。(小西昌幸)